富貴寺大堂　古代美学の研究

富貴寺大堂山門　侵入者からの保護

富貴寺への入り口は、市の中心部から南東にある小さな谷間の片隅に立っています。この入り口は地味なものです。門の脇には 2 体の石像である仁王が立っています。恐ろしい形相をした神様は、おそらく江戸時代（1603 年から 1867 年）に彫られたものです。この石像は田染石を使用して彫られました。ある種の柔らかい石でこの地域固有のものであり、石造りには理想的な石です。神社やお寺に設置されている多くの門の守護者のように、右のものが口を開いており（「阿」）、左のものは口を閉じています（「吽」）。「阿吽」は、仏教の教理であり、ギリシャ語の「アルファであり、オメガである」とは似ていないこともないのですが、すべての物事の始まりと終わりを表しています。2 体の守護者の足元には、蓮をモチーフにした石造りの台座があります。

木製の門の屋根で守られているにもかかわらず、この仁王像は、今やすり減って、色褪せており、寺院の全体的な美感を示す前置きとなっています。

阿弥陀堂　極楽浄土への道

階段の頂上には 2 本の巨木があります。左側は榧の木（カヤの木）、右側は銀杏の木であり、落ち着いた美しい寺院の建物を守るようにそびえ立っています。国東の仏教遺産において崇敬される場所となっています。寺院は、阿弥陀堂として平安後期（794 年から 1185 年）に創建されました。阿弥陀仏像を祀っています。信者を極楽浄土へ救済する仏教の神様です。近隣にある宇佐神宮の宮司のうちの 1 人の指示に従って建立されているようです。建物の弧を描くような屋根のラインは、仏教における神聖な動物の 1 つである不死鳥に似せる意図があります。

富貴寺は、九州において現存する最古の木造建築構造を有しています。国宝指定されており、日本では最高峰の三大阿弥陀堂うちの 1 つとされています。（他の 2 つは、北日本にある中尊寺金色堂、京都近くにある平等院鳳凰堂です）。建築構造は、榧の木材から作られています。伝説によると、この榧の木は 3 千メートル超もあり、周囲全体を覆っていました。民話では、木を伐り落そうと試行錯

誤していたと伝えています。いくら切っても切っても、毎晩元の形に戻ってしまいましたが、最終的には打ち勝ち、寺院建立後に余った木材は、牛の背に引かれて別の地元のお寺へ運ばれました。伝承ではそのように伝えられています。

寺院の建物は、木の葉の四季の移ろいを反映しながら、森林の中のくぼみに堂々と立っています。

阿弥陀堂の境内　輝く遺物

寺院の内装は年月を経ており、創建時の内装が今のものとは異なるものであったと想像するのは難しいです。極楽浄土を基盤とする阿弥陀如来に相応しく、元々は、すべての箇所に、赤、黄色、青、緑、など明るい色彩が使われていました。さらに内装表面の多くは豊かな壁画で覆われていました。86 センチメートルの阿弥陀如来坐像は、金の木の葉に覆われており、反射する光は、低いひさしの下から入り込んで落ち着いた光になり、光り輝いていたにちがいありません。夜にはろうそくの光が揺れて美しく輝いていたはずです。

今では榧の木の木目は、仏像周りの四柱にだけしか確認できませんが、これらはかつて鮮やかな仏像の絵で覆われていました。仏像の背後には極楽浄土の風景で美しく飾られた壁があります。参拝者は、案内の通り時計回りで中央の仏像の周りを周るように廊下をぐるりと進みます。上部の壁から見下ろすと、極楽浄土の描かれた無数の絵があります。ひどく色褪せていますが、今でも見えますし、目が暗闇に慣れてくると暗がりから徐々に浮き上がってきます。

日本の美的感覚は、室町時代(1336 年から 1573 年)に潮流の変化がありました。禅と茶道の美的感覚は、美術と建築においては、より節度のある洗練された様式を重んじる傾向になりました。明るい色彩の使用は回避されて、経年変化した効果が称えられ、このような建物は、使い古された年月のまま残されました。幸運なことに、時間の経過による損壊（および第二次世界大戦で本堂のすぐ後ろに落ちた影響）は、ほとんどなく、素晴らしき寺院の美と平和の雰囲気を損なうことはほとんどありませんでした。

※富貴寺の素晴らしい原寸大模型が、宇佐市近くの大分県立歴史博物館で見られます。当時の栄華を再現した色彩で本堂とその内装を体験できます。

寺院の敷地　鬼、守護者と石造りの塔

ほんの少しだけ小高いところに、本堂があります。ここでは毎日儀式が行われています。訪問者へのアピールは、阿弥陀本堂があるために小さくなってしまいますが、スロープのすぐ上で開催されています。ゲストの入場を歓迎しています。左方向の部屋には是非入ってみて下さい。古代のお面が 2 つ飾られています。このお面は鬼の踊りで使用されるもので、山岳信仰の時代に作成されたものです。鬼は、この地域独特の宗教遺産の特徴と、近くの天念時で毎年開催される喧々囂々としたお祭りの特徴が混ぜ合わさって具現化したものです。

阿弥陀堂周辺の敷地には、沢山の仏像と彫刻があります。これらは石造りの芸術性における国東半島の歴史を示すものです。建物の左手方向には、珍しい収蔵物が立っています。小型ですが、仏教における冥途の裁判官である十王像が精巧に刻まれており、この一団が、煉獄にいる者の運命を判断します。また寺院の中庭に立つと、笠塔婆と呼ばれる石造りの塔があります。頭部は修行僧が編んだとされる笠に似せています。小型の塔である五輪塔は、当時人気の高い密教において、記念碑として使用されていました。5 つの塔の「輪」とは、（下から上に）土、水、火、空気（風）そしてエーテルを象徴しているとされています。

榧の木の伝説

昔々、巨大な榧の木が、田染町にある古風で趣のある西洋フキの谷で育っていました。この木は非常に大きかったために、朝にはその影が川の方にまで届き、夕方には田畑まで届くと言われていました。

ある日、伝説的な僧侶である仁聞は、この場所を神聖な土地として崇拝の対象とすることに決めました。阿弥陀如来像を安置するための本堂を建立するよう命じました。しかし、木びきが寺院を建立す

るための木材を求めて、巨大な榧の木を切り出したときに、奇妙なことが起こりました。いくら切っても次の日には、木は元の状態に戻っているのです。木びきは困り果て、どこを変えたらよいのかわからずじまいでした。ある日、この木のせいで太陽が遮られている地元の植物が、このように教えてくれました。「毎日の終わりに、切った木から出るおが屑を燃やしてください。そうすると木を倒すことができますよ」。助言に感謝しつつ、木びきは最終的に木を倒すことができました。仁聞の命令に従い、大きな寺院が建立されて仏像が刻まれました。一本の榧の木からすべてが生まれたのです。残りの木材は牛の背に積み込まれて運ばれていきました。牛は真木大堂で止まり、以降続けることを拒みました。

これは富貴寺として知られている国宝の伝説です。今日、多くの人が、この聖地付近にスピリチュアルなものを感じています。大きな榧の木は再びこの地で育っています。